
RESISTANCE [レジスタンス]

糖類王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RESISTANCE「レジスタンス」

【Nコード】

N6948I

【作者名】

糖類王

【あらすじ】

ー全てがここで始まり、全てが終わるー

2012年、突如日本に来たロシアからの“緊急連絡”。一枚の新聞の記事に書かれたロシアの“怪奇な事件”。そして、国連が極秘に行っていた“謎の実験”。

日本の自衛隊に配属している尾崎 大介達は緊急連絡を要請したロシアへとむかう。だが、そこで待ちうけていたのは廃墟になったロシアと、謎の生物“キメラ”だった。これも、極秘実験に関係しているのか？人類の存亡をかけた戦いが始まるうとしていた。

これはゲームの「RESISTANCE」を自分なりに改造し、小説化したものです。
ゲームとは全く別の話になっています。

RESISTANCE キメラ報告書1 ジョニー中尉

ハイブリッド

最も多く存在するキメラで、よく遭遇する。

彼らは専用の銃「ブルズアイ」を装備しており、離れた場所からでも相手を圧倒する。

集団で取り囲まれた場合は非常に危険な存在となる。

この進化型もいるが現在調査中。

メニアル

キメラの中では一番のザコ。

だが、メニアルはほぼ集団で襲撃してくるためあなどれない。

油断して殺された仲間も多い。

油断は禁物だ。

クロウラー

キメラウィルスの感染源となるゴキブリのような極小型のキメラ。

スパイアと呼ばれる輸送機で空から急襲。

大群で飛散し村、街全体を数分で壊滅、感染させてしまう恐ろしい存在。

リーパー

人間に感染することなく任務を終ると、クロウラーはリーパーにへと進化する。

サソリのような形をしており、集団で襲い掛かる。

人間などの死肉を餌としている。

さらに、この進化型もいるらしいが詳細不明である。

チーム・RESISTANCE ジョニー中尉より

2012年

2月 18日

RESISTANCE キメラ報告書1 ジョニー中尉（後書き）

感想など書いてくれたら、嬉しいです。
少し修正しました。

1章 出発

たまたま落ちていたをラジオをつけた。

つながった。良かった。まだ、ラジオ局は無事なようだ。

雑音がながれたと思うと、ラジオは語りだした。

人類の敗北を。キメラの勝利を。

2012年 2月 12日 AM 5:37

人類敗北の4日前

日本 自衛隊屯所

俺、尾崎大介はさつき家に電話をしたばかりだった。

もうすぐに、新しい命が生まれるからだ。

そんな感動している時に、ドタバタやってきたヤツがいた。

なんだよ…いい時に。

「おい、これを見たか？」と現れたのは雪村だった。

「雪村 篤」 俺の戦友で訓練所で共に成長してきた一番の友人だ。

「何だよ、この新聞の記事がどうかしたのか？」

雪村が持ってきたのは1枚の新聞の記事だった。

「いいから見ろって！」少し慌てているので、俺だけじゃなく他の

仲間もその記事に注目した。

そこには大きい字でこう書いてあった。

『ロシアの村、町消える。ロシアの新たな兵器開発が原因か。』

「これがどうかしたのか？」

「実は、さっきまたまた室谷隊長の話聞いちゃったんだよ。例の極秘実験のこと。」

『例の極秘実験。』隊員達の中では少し噂にはなっていた。

なんだっけ…生化学実験とかなんとか…まあ噂だけど。

「で、それがこれとどういう関係なんだよ。」

「よく聞けよ。ここからがその問題点なんだ。」

雪村は一唾飲み込んでから言った。

「その極秘実験をおこなった場所がロシアなんだ。」

それを聞いた全員がいつせいに黙り込んだ。

「まさか…」

「いやいやないないって…」

「可能性はあるよ。あとそれともう一つ重要なのが…」

と、雪村が続きを言おうとした瞬間放送が鳴り響いた。

『今から緊急会議を開く。すぐ隊員達は会隊議室に集合せよ。くりかえす…』

「雪村。もしかして…」

「これかもね。」

そういつて雪村は例の記事を片手で、わざとらしくヒラヒラゆらした。

2012年 2月 12日 AM 6:12

「多分、みんなこの記事を見てないやつはいないと思う。」

室谷隊長がしゃべりだした。いつもは冷静沈着な隊長だが今回は違った。

落ち着きがない。少し慌てているようだった。

それほど、何かやバイ事がおこったにちがいない。

たぶん、『例の極秘実験』が、関係しているとは思うが…

「おまえらも、少しは耳にしていると思うが…」

隊長は、少しためらいそして、強い口調で言った。

「例の極秘実験のことだ」

やっぱり。俺は、わざと雪村の顔の方を見た。

雪村も「やっぱりな」という顔をしていた。

宝くじなど予想していたことが当たるのは嬉しいがこういうのは、はずれていてほしい。

隊長が話し出す。

「さっき政府（内閣総理大臣）から自衛隊出動要請があった。」

隊員達が騒ぎだした。

「何がおこったんですか？」と質問したのが、自衛隊第二突撃部隊の「山口 有志」であった。

山口とは以前、イラクでの物資支援で行動が一緒になり、その時に知り合った。

頭がキレて、戦場でケガした仲間をおいていけないとても友情に熱い男だ。

俺も、そんな山口が大好きだった。

その山口の質問に対して隊長は…

「詳しいことはわからん。ただロシアから『緊急事態だから、応援をよこしてくれとのことだ。』」

それに対し、山口が反発した。

「それじゃ、わけがわからないじゃないですか！」

「私にいわれてもしようがない、上からそう言われたんだ。」

隊員達は、また騒ぎだした。

さらに山口だけでなく、他の隊員達も質問をあびせる。

あたりまえだ。緊急事態と言われても、説明がたりなさすぎだ。

緊急事態？応援をくれ？ふざけるな？

俺も怒りに満ちて、質問をあびせる。質問どころか、抗議になっていた。

それに、室谷隊長が机を叩いた。いや叩いたよりどついたと言った

ほうがわかりやすいか。

「いい加減にしろ！」

隊員達は静かになった。隊長がここまで怒ったのは初めて見た。

「今はこんなことを言っている場合ではないんだ！とんでもない事になるかもしれないんだ！」

「…とんでもないこと？」俺が隊長に静かゆつくり聞いた。

「この記事を見ただろう、ここに書いてある事が…例の極秘実験が関係している可能生がでてきた。この極秘実験は国が絡んでいることもだ」

「…国がですか？」

「そうだ。さらに、その極秘実験には日本人の学者も数名いるそう
だ。」

「じゃあ…」

「そう。他人事じゃない。国が絡んでいるし、その学者の安否も心配だ。」

すると、今まで黙っていた雪村が。

「その、ロシアの応援要請は日本だけなんですか？」

「いや、ほぼその極秘実験にかかわっている全ての国がそうだ。」

「それに…」

隊長が少し言いかけた。

「もう新聞にまで載っているんだ。マスコミが騒ぐのも時間の問題だ。いいか、時間の有余はない！このことは極秘任務とし、すぐにもロシアに飛び立つ！心の準備をしておけ！以上！」

室谷隊長が言ったと同時に「イエッサー！」と返事をした。

隊員達は、すぐに準備をした。

こうして人類の存亡をかけた闘いが始まろうとしていた。

人類の敗北とは知らずに…

2012年 2月 12日 AM 9:17

ロシアへと旅立つヘリが空にまっけていった。

俺もヘリにへと乗り込み、俺が乗ったヘリも空にまっけた。
風が冷たい、冬だもんな…

俺はロシアに旅立つ前に、妻に電話をした。

もちろん、極秘実験の事は内緒で。たとえば妻でも、そのことは話はしなかった。

ただ、すぐ帰ると。

「おい、尾崎！窓閉めてくれ寒いよ。」

「ワルい！今閉める。」

少し、会話で盛り上がっていたが、ロシアに近づくにつれ黙りこんでいった。

俺らがロシアにつくころには学者達を捜しているどころじゃなくなっていた。

なぜなら、もうすでにロシアはれっきとした戦場と化していたからだ。

だが、俺らはそんな情報は知らされていないし、知るよしもなかった。

2012年 2月 13日 PM 4:57

ロシア上陸

1章 出発（後書き）

感想など書いてくれたら、嬉しいです。

「ロシア上陸」イギリス軍海兵隊モービル大佐

「ロシア上陸」

我々はロシアの応援要請を受け、今日ロシアに上陸した。だが、これはどういうことだろうか。

全てが壊滅していた。

そして、私は見た。

見たことのない巨大なタワー、そして謎の生物。

驚愕だった。ロシアの応援要請があつたのは、昨日だ。

それがたった1日で壊滅していた。

詳細を知るべく学者達の研究所を目指しているとあの謎の生物に奇襲された。

その生物は黄色の目で蛇のような頭をし、二足歩行だった。

私が殺られそうになったとき3人の日本人が助けてくれた。

その3人は強く、簡単にヤツらを殺してしまった。

そして私達に「頭を狙え」とヤツらの弱点を教えてくれた。

彼らがいなければ我々は全滅だっただろう。

彼らの勇気ある行動はまさしく日本というサムライだった。

2012年 2月 13日 イギリス軍海兵隊 モービル大佐 より

2章 ロシア上陸

2012年 2月 13日 4:42

ロシア上空

ついに、俺たちは確実にロシアに近づいていた。

「見えたぞ、ロシアだ。」

山口が言った。今回の極秘任務で俺と山口が一緒になった。

雪村は突撃部隊の第三部隊、俺らは第二部隊、室谷隊長達は第一部隊だ。

突然、トランシーバーが鳴りだした。隊長からだ。

「もうすぐでロシアに着く、準備をしておけ。」

すると、隊員の1人が何かに気づいたようで俺に声をかけて来た。

「あれ…何ですかね。何か建物みたいなものが…」

そう言われて初めて気づいた。しかも…1個じゃない。

「なんなんだあれ…あんなの初めて見た。いや見た事がない。」

俺は、急いで通信機をとった。

「隊長！見ましたか！？あの建造物！」

「ああ、今確認した。何も無いと思うが一応様子を見配っててくれ。」

へりは、その建造物の真上を通りすぎようとしていた。

…異常はない。何か変わった変化もない。

何の変化もないまま、建造物の真上を越えた。

これは…

「…何もおこりませんね。」

「なんだよ。見かけだおしかよ、ビビらせやがって。」

俺も山口も何もおこらなかったの、一安心し、隊長に報告しようとしたその時だった。

豪快な爆音が響いた。ドカーンというそれもとてつもない。

俺は見た。たぶん、山口も。

第六部隊のヘリが炎上して、宙をまっていたのだ。そして地球の重力でヘリは落ちていった。地面にへと…。

俺達は驚愕だった。

言葉もせず、ただ第六部隊のヘリが落ちていく様子を眺めていた。隊長に報告しなければと思ったのには、数十秒かかったかも知れない。

いや、もしかしたらそれ以上。

それぐらい俺はぼーっとしていた。

我に返った時には、山口が通信機を取っていた。

「隊長！第六部隊が！何者かに撃墜され…」

山口は固まった。そして窓を疑視していた。

俺も山口が見ている方向を見た。

解った、そう解ったのだ。

第六部隊のヘリを落とした物、謎の建造物の正体が。

そこには、全ての答えがのっていた。

そう、謎の建造物はいわば大砲。いや、大砲というよりはミサイルに似た形。

が、何発もいや何十発のミサイルをヘリに向けて撃ってきているのだ。

すぐに、隊長から返事が返ってきた。

「なんとしてでも逃げきれ！」

その言葉とともに、操縦士がヘリを右に傾けた。

だが、建造物は右にも左にもある。避けるのには至難の技だ。

しかし、今は信じるしかなかった。

俺達が出る“こと”はそれぐらいしかなかったからだ。

2012年 2月 13日 4:57
ロシア

あの後、結局俺達はヘリを撃墜させられる直前にパラシュートでヘリから脱出したのだ。

そしてみんなバラバラになってしまった。
一体何処にみんな着陸したのだろうか？

山口とも途中まで一緒だったが、別々の地点に着陸してしまった。

だが、俺は山口よりも雪村を心配していた。

なぜなら、パラシュートで飛んだ時に雪村が乗っていた第二部隊のヘリが爆撃されたのを見たからだ。

だが、幸運な事に当たったのはヘリの胴体でなく、ヘリの後ろのプロペラだったからまだ大丈夫とは思うが…

大丈夫。雪村ならきつと生き残っているはずだ。

あいつは、悪運の強いヤツだから…きつと…。

俺は、とりあえず仲間と合流しようと思った。

ヘリから脱出するときに隊長から通信がきたのだ。

隊長は「いいか、脱出したら北にある『ハバロフスク』を目指せ！
そこが合流地点だ！」

そして、隊長からの通信は途切れた。

隊長（第一部隊）達も無事だとは思うが…。

それにしても“あれ”はなんだったんだ？

ミサイルのような形をしていて直径が東京タワーぐらいはあり攻撃してきたあの謎の建造物。

あれは一体誰が作ったのか？

ロシアは確かに軍や兵器はかなり強力の世界でほぼトップの座をアメリカと競争しているぐらいだ。

しかし、あんな兵器は今まで見た事がない。

例えトップのロシアでも、そして次のアメリカでもあんな物は…。

あんな兵器はたぶん…つくれないと思う。

いや、絶対に。正確に狙ってくる弾道ミサイル。そしてそれを撃つミサイルの形をした謎の建造物。

とてもじゃないが、地球の科学力ではあんなものは…。

じゃあ誰が？何の為に？あれも『例の極秘実験』に関係しているのだろうか？

そしてこの街の有様はいつたい…。

大介は空から地面を眺めた時も、パラシュートで着地した時もこの街の有様が気になっていた。

まるで戦争した後のような姿をした街。

枯れた木々。壊れた建物。崩れかかって煙を出している高層ビル。ロシアからの緊急連絡からまだ一日しかたっていない。

一体何が起こったのだろうか？

住民は？どこかに避難したのだろうか？それとも…死ん…

そこで、大介が考えている時その思考は遠くからの爆音で止められた。

何かあったのか？

大介はその爆音があつた場所に急いで向かった。

とりあえず、見えやすい様に少しもりあがっている丘に登った。

何やら銃声も聞こえて来た。

…誰かと戦闘中なのか？

大介は少し丘から顔を出して見た。

するとそこには、第一部隊のヘリが炎上していた。

その近くで誰かと戦闘しているのがわかった。

あれは…隊長！室谷隊長だ！

遠くからでも隊長が仲間に指示しているのがわかる。

隊長達（第一部隊）が何者かと戦っているのだ。

あれは…何だ？

人間…いや、それにしても肌の色が黄色にちかい色。そして…背中から何か生えてないか！？

ちくしょう、遠くてよく見えない。

隊長達は一体、何と戦っているんだ？

連絡しようとしたが、通信機が壊れている事に大介は気がついた。
ならば…！

大介は携帯用の武器をとりだした。

普通に自衛隊で配布されているハンドガン『シグP228』
オートマチック

自動式拳銃型で多数の弾丸を詰めたマガジンによって次弾が装填される。

単発でフルオートは無理だが、半自動式拳銃でとても役に立つ。

俺の愛用の銃だ。

しかし、今そんな事を言っただけである場合ではない。

速く隊長の所に駆けつけなければ！

俺は愛用の銃『シグP228』を片手に持ち、急いで隊長達の所に走った。

「急げ！ヤツらをこちらに近づけるな！」

室谷隊長は叫んでいた。あいつ等は何者なんだ？あいつ等にもう何人か仲間を殺されてしまった。

ちくしょう！化け物め！

「林！お前は右にまわれ！本田！おまえは左だ！回り込んでいっせいに攻撃する！いけ！」

隊長が叫んだ後、林と本田は左右に走っていった。

それと同時に、ほかの仲間も走っていった。

隊長も援護射撃をする。

だが、向こうも負けてはいない。

まるでこっちの作戦が読まれていたかの様にヤツらは左右に別れて攻撃してきた。

…どうやらヤツらもバカじゃないらしい。

少しは化け物にも知能があるということか…。

「ひるむな！応戦しろ！」

一方、大介も隊長達の戦っている場所へと近づいていた。

…頼む！間に合ってくれ！

この後、大介は知る事になるだろう。

隊長達が戦っている謎の化け物のことを…。

そして確実に近づいていた。

人類敗北の日に…。

確実に…。一分、一秒確実に。

2章 ロシア上陸（後書き）

やっと更新できました。
遅れて申し訳ありません！

ある学者の話

ある学者の話

やあ、こんにちは。

僕の名前はジョン・ワダー博士。

みんなからはジョンってよばれているんだ。

だから、君も僕のことジョンって呼んでくれ。

いや、それにしてもすごい！キメラには感動したよ！！

あれ？「キメラって何？」って顔してるね。

おいおい冗談はよしてくれよ。たしかに僕も冗談は好きだけどさ。

あれ？本当に知らないの！？

テレビは？新聞は？

えっ、本当に知らないんだ…。

…君、無神経すぎじゃない？

今、戦っている人達に失礼だよ君！

全く…しょうがない！僕が教えてあげるよ。

もちろん知っていることだけだけど…。

いいかい？キメラってのは…

あっ…ちよつと待って。

えっ…本当に？ウソ！ありがとう！

いま助手から電話がきてキメラの解剖が終わったって！

やった！あっ…ゴメン！話はまた後でいい？

えっ今すぐに？

じゃあこの今書き上げてる報告書みときなよ。

これで少しはキメラについてわかるはずだよ。

あと、それまだ途中だからね。

それと報告書見たことは内緒にしておいてね。

普通は見せちゃダメなんだけど。

君は特別だよ。

わかった？内緒だからね！絶対にだよ？

OK！じゃ僕が帰ってきたら話すからね。
じゃ、またあとでね！

ある学者の話（後書き）

感想まってるよ。

ジョン・ワード博士より

3章 絶体絶命

前回までのあらすじ

俺、尾崎 大介。一番の戦友、雪村 篤。同じく戦友で仲間想いの山口 有志。

そして、自衛隊隊長の室谷 晃久隊長。（室谷隊長）

俺達はロシアからの緊急連絡によりロシアへと旅立った。

だがしかし、いきなり謎の建造物から襲撃。

俺達はバラバラにはぐれてしまった。

そんな時、爆音が聞こえて大介は第一部隊が謎の生物と戦っている所を目撃。

大介は隊長達のもとへと急ぐのだった。

2012年 2月 13日 5:32

隊長。無事でいて下さい！

大介は瓦礫に囲まれた地面の中隊長達のもとへ走っていた。

大介は第一部隊のヘリの炎上した煙を頼りに走っていた。

呼吸が苦しい。

肺が今にも張り裂けそうだ。

だが休んでいる暇はない。

急いで隊長達の下へいかなければ、あの謎の黄色い生物に全員殺されてしまう。

くそ！嫌な予感がする。急げ！

「撃て！奴らをこちらに近づけるな！」

隊長達は戦っていた。

だが、状況は最悪だった。

向こうはまるでこちらの考えが解っているかの様に戦闘パターンを変えてくる。

さらに、奴らの使っている銃。

弾も速く、当たったら一瞬で体に一個の穴が空く。

そこから大量出血させて殺されてしまう。

とても恐ろしい銃だ。

あれさえ手に入ればまだ勝てるかも知れない。

だがこちらは、一人いや一匹も殺してはいない。

戦えば戦うほど、撃てば撃つほど、こちらの人数が減っていく。

しかも、弾は確実にあたってはいるが、あたった場所がまるで嘘のように塞がっていく。

そして、また立ち上がってくる。

ちくしょう！奴ら化け物に弱点はないのか？

ふざけやがって！

「隊長！弾がもうありません！」

「全部か？」隊長が答える。

「はい！もう何も…残りのマガジンも使い果たしてしまいました！」

「くそっ！仲間の死体から一発でもいい！探せ！仲間の死を無駄にするな！」

みんな出来るだけ隊員の死体に近づく。隊長も一人の死体にちかづいた。

その隊員は顔に血を浴び、目は上を向いていた。

しかし、手だけは銃を離さずにいた。

隊長はその隊員に敬礼し、急いで銃を取り弾数を数えた。

弾はたったの三発しかなかった。

だが…無駄にはしない！

マガジンに装填してスライドをひいた。

弾は三発。

化け物は撃つても回復する。

狙うなら…アタマだ！

室谷隊長は壁から身を出し、シグP228のトリガーをひいた。
バンッ！

一発撃った。だがあたったのは肩だった。

化け物はひるむ。

バンッ！

二発目。

あたらなかった。あと一発。

化け物は体勢を立て直してきていた。

最後の一発。

よく狙いトリガーを引いた。

バンッ！と音とともに、最後の鉛弾が銃口から飛び出す。

グチャと音がした。

見ると化け物は頭を抑えていた。苦しそうに倒れていった。

やった！ついにダメージをあたえた。

奴らの弱点は頭だ！

「みんな聞け！化け物の弱点は頭だ！残りの弾を全部ぶちこんでやれ！」

それを聞いた隊員達が残りの弾を全て化け物の頭に撃ちこむ。

だが、ハンドガンでダメージが少ないのかすぐに立ち上がる。

くそ！攻撃はくらっているのに！

もっと強い武器があれば…！

まていやあるぞ！奴らの銃だ！

あれさえあれば…まだ希望はある。

だが弾はない。さっきの指示でほぼみんな弾を使い果たしてしまっただけだ。

化け物は少しずつ立ち上がり体勢を立て直してきていた。

もっと早くに気づいていれば…

…くっ、俺の…ミスだ。

室谷隊長は隊員達のほうをゆっくり見た。

隊員は何かと思い隊長のほうを見る。

「みんなすまん。俺の命令のせいで…」

「隊長…何いつてるんですか！弾はなくなりましたけどまだ…」

「いや、私のミスだ。私があんなことを言わなければ…」

「隊長！諦めるのまだは早いです！なんとか体勢を立て直して作戦を…」

「作戦だが…みんなこの命令は…最後と認めてくれ」

「隊長…何を…」

「私は奴らの銃を奪い攻撃をする、そしてその間にお前らは逃げろ」
隊長は続ける。

「本田、林あとは任せたぞ。隊員達を無事に…」

「隊長…」

みんな悔しそうに泣きはじめた。

室谷隊長は少し笑いそしてゆっくり隊員達に敬礼をした。

そして「今までご苦労だったな」隊長は寂しそうに言った。

隊長はそう告げると、手で合図し行くように指示を下した。

隊員達は行った。

これで思い残すことはない。

ただ…一つだけ…。

室谷隊長は懐から一枚の写真を出した。

そこには、可愛い赤ん坊が写っていた。

まだ生まれたての新しい命。

もう一度…。もう一度家族に会いたい。

だが…それも叶わぬ願いか。

室谷晃久はフツと笑い、弾が無くなったシグP228を捨てた。

そして視線を化け物に向けた。

「さてと、御祈りも済んだし化け物退治としましょうか」

室谷隊長はすぐさま一体の化け物に目をつけた。

そして全速力で走り、化け物に体当たりをくらわした。

さすがの化け物もひるみ銃を落とした。

室谷隊長はすぐさま銃を拾い物陰に隠れた。

化け物達も隊長の姿に気づき銃を乱射してきた。

銃弾が後ろから飛んでくる。

カンカンッ、物に銃弾があたっているのがわかる。
怖い。

俺もあの化け物に、今俺が手にしている奴らの銃で殺されてしまうのか？

いや、死なない。俺には帰る場所があるから。

妻。そして新しい命のために！

俺は…俺は！生きて、生きて帰る！家族の下へ。必ず帰ってみせる！

だから、こんな場所で…！！

「死んでたまるかー！！」室谷は叫び銃を乱射する。

一体、二体、三体次々に化け物が倒れていく。

いける！俺は生きて帰る！！

絶対に！？

急に体が傾いた。

肩が焼けるように熱い。二発の銃弾が体を貫通したのだ。がはっ！口から血を出し、肩を抑えて室谷晃久は倒れた。意識が盲ろうとする。

あと少しだったのに…もうダメなのか？

すまん。俺は俺は情けない男だったよ。

約束の一つも守れないなんてな…

“必ず無事に帰る”

電話で妻と交わした約束が蘇ってくる。

もう…意識が…続かな…

隊長がまぶたを閉じようとした。

しかし、おかしかった。

いつまでたっても化け物が俺を殺しにこないのだ。

銃声は聞こえているのに…

ハッ、感覚までおかしくなっちまってら。

どうやらもう死は近いらしい。

だが、どこかで聞いたことのある声に目が覚めた。

誰かが戦っている？

本田か？それとも林？いやそれはない。あいつらは他の隊員を連れて逃げたはずだ。

じゃあ誰だ？

室谷隊長はまぶたを開けた。

そこには、見た事がある姿。しかも何人も。

誰かが俺に話しかける。

「隊長！しつかり！良かった！息はしてるぞ！！」

そこには、本田の姿があった。

なんでだ…逃げたはずだろ？

本田だけじゃない。林も…逃げた隊員達も…。

そして、シグP228を片手に持ってこちらに近づいてきていたのは…

尾崎。尾崎大介だった。

「隊長。随分また派手にやられましたね」尾崎が優しく声をかける。
「ボロボロのお前に言われたくはないがな」そう言い返すと隊長はニツと笑った。

大介も無傷ではなかった。

顔には、弾がかすった後、服に弾が貫通しているのか赤色に染まっていた。

大介もニツと笑みを返し、そして隊長のそばの敵の銃をとった。

「大介！こっちは片付いた！後は頼む！」

「ああ、任せろ！」

隊長が大介に言った。

「奴らの弱点は頭だ！大介！」

大介は頷いて、その場を離れた。

「大介！」と言って近づいて来たのは山口有志だった。

大介が第一部隊のへりに近づいている途中、山口と出会ったのだ。どうやら山口も第一部隊のへりを目指していたらしい。

「有志！これを使え！」

そう言つて俺は奴らの銃を渡した。

「使い方は？」

「なーにアサルトライフルと一緒にだ」

山口はフツと笑いマガジンを入れた。

「さ、行きますかね！」

そう言つて俺達は、化け物に狙いを定め銃を撃った。

2012年 2月 13日

人類敗北の日まであと3日。

3章 絶体絶命（後書き）

感想待ってます！

キメラ報告書

キメラ報告書

ジョン・ワード博士

キメラ

c h i m e r a

キメラウイルスに感染した人間は、改造センターで様々なキメラが
つくられる。

キメラは代謝能力が人間の1.2倍と極めて高く、体温も高いためオ
ーバーヒート防止のため背中に冷却装置が取り付けられている。
その冷却装置を体にするために体にホースが繋がれている。

まだ、解らないがそのホースを壊せば確実にキメラにダメージをあ
たえられるかもしれない。

しかし、これは『ハイブリッド』など二足歩行で歩いているキメラ
だけであり、全てのキメラにあるという訳では無い。

厄介なのはそこで、キメラにはいくつかの種類がある。

『ハイブリッド』いわく、二足歩行の者や『リーパー』の用に虫型
のキメラまで存在する。

より、他の種類のキメラが何体いるかまだ解らない。

現在詳しいことまではわかってはいないが解剖の結果、キメラの頭
にはAI（人工知能）が埋められていたことがわかった。

このことから、キメラは誰かの手によって造られたに違いない。

私達は『例の極秘実験』が鍵を握っていると思われる。
だが定かではない。

これから私達はキメラについて研究していくつもりだ。

なお、この報告書はチーム・RESISTANCEの指揮官　ター
ルズ・ワナーに送って欲しい。

2012年 2月 28日 ジョン・ワルダー博士

4章 仲間

「有志！右に一匹いるぞ！」

大介は叫んでいた。意外と敵はしぶとかった。数はこちらしか多いはずだが、敵は回復するので中々死なない。

確かにこの銃は強い。弾があたると相手の体に大きな穴が空く。だが奴等に空いた穴はみるみる塞がっていくのだ。奴等の回復能力は半端じゃない。

やはり、頭を撃ち抜かないと確実に死なないのか？

だがその“アタマ”は銃弾をさらりとかわしてくる。まるで映画でも見ているような光景だ。

例えるならばそう「マトリックス」だ。

ひゅんひゅんと飛んでいく銃弾を右に左へと軽やかに避けていく、その光景を思い出した途端に笑いが込み上げてきた。なぜならそのままの通りだったからだ。

しかしその笑いはすぐに銃声で消される。そして我に戻る。

これは映画でも漫画の世界でもない。これはまぎれもなくリアル（現実）だ！

そう思った瞬間に体が動き、銃口を化け物の頭に向ける。まるで操り人形のように。

俺は狙って銃のトリガーをひいた。銃弾はバンツという銃声とともに化け物の頭に向かっていく。真っ直ぐに。

グチャツという音が周りに響く。頭にあたったのだ。そして豪快に化け物が倒れていった。その倒れて『ドサツ』という音が鳴るまで俺は視界から外さない。

倒れてた。化け物はピクリとも動かなかった。死んだのだ。

気がつけば有志達が残りの化け物を倒していた。

俺達は化け物に勝ったのだ。この修羅場を乗り切った。だが…震えが止まらない。ガクガクと手が震えていた。

有志が俺の様子に気がついたのか傍にかけよってきた。

「大介！大丈夫か？」有志が心配して言った。

「ああ…悪い。大丈夫だ…けど」大介が答える。

「けど？」

「今更だけだよ…震えが止まらねえんだよ、怖くて怖くて…目の前に転がっている仲間の死体を見ると…俺も化け物に殺されると思うと…怖くて仕方ねえんだ」

大介は震えながらしゃべった。今までと戦ったことがない化け物。

仲間の死。そして自分の死への恐怖。全てが怖かった。今まで一緒だった仲間が殺された。目の前で…。

有志がそれを聞いて答えた。

「大介。それは俺も一緒だ。いつ殺されると思うと怖くて仕方ねえ。でもな、それが仲間のためになると思うか？」

そう言くと、有志は大介の震えてる手を強く握り有志はやさしく言った。

「俺達は生き残るんだ。死んだ仲間のためにも、俺達は生き残らなければならねえ。絶対にだ。お前には家族がいるんだろ？ならなおさらだ。」

有志がやさしく言くと、俺はいつのまにか震えが止まっていた。恐怖も消えた。

俺は有志に負けないように強く言った。

「ああ、そうだな」

俺が言くと有志はニヤリと笑った。

俺も笑みを返しそして言った。

「有志。ありがとな！」

そして有志も笑みを浮かばせた。すると本田が声をかけてきた。

「終わったか？隊長は今、衛生藩の佐々木に見てもらってる所だ。命に別状はないらしいが重傷らしい。よって場所を移して隊長を治療しなくてはならない。そこで、誰かどこか隠れられる場所を探し

てきてほしいんだ。出来れば少人数で、私や林が行ってもいいが…
隊長があの状態ではな…」

本田はそこまで言うと言ってしまった。
すると、大介が一步本田の前にでた。

「俺が行きます！行かせてください！」

「なら、俺も行きます」と、有志も言った。

「本当にいいのか？あの化け物がうようよいるかもしれないんだぞ？」

「はい！」と大介は強く言った。

それにつれて有志も頷いた。

本田は了解したように二人に通信機を渡した。

「隠れる場所が見つかったら、これで連絡してくれ。コードは0
0716だ」

「わかりました」大介は答えた。

「銃はそれを持っていけ、それしか役に立つはずだ。あとそれと…」
そう言つて本田は腰のポーチから三個の硬くつやつやした物を取り出した。

「破片手榴弾だ。三個ある持つていけ。何か役に立つはずだ」

「ありがとうございます！」

「よし、では行ってくれ！隊長は安全な所まで運ぶから心配するな」

「はい！」

俺達は街の方向へと歩き出した。

すると、後ろから足音が聞こえてきた。あの化け物かと思いきりして後ろを見るとそこには、林と数名の隊員の姿があった。

「林さん、どうして…」

「やはり二人じゃ厳しいと思ってな。隊長からの命令さ」

大介と有志はクスツと笑いまた歩き始めた。

俺はこの仲間達を絶対に死なせないとい心に誓った。仲間の死に様はもう見たくない。そして、雪村…無事でいてくれよ。

俺はへりからの脱出した時の事を思い出していた。

燃えて落ちる雪村篤の乗った第二部隊のへりの事を…

生きていてくれよ、雪村！

俺の顔に不安さが、でていたのか心配して有志が話しかけてきた。

「…篤のことか？」有志が言った。

「なら、大丈夫だろ。あいつが死ぬようなたまじゃないことはお前が一番知ってるじゃないか」

「…そうだよな」俺は静かに返事を返した。

大介は少し嫌な予感がしていた。

まるで全てを終わらすかのように…

無事だよな？なあ雪村？

大介はその嫌な予感をなぎはらった。

その“予感”が当たるとも知らずに…

2012年 2月 13日 6:29

その頃、雪村篤の乗った第二部隊のへりは墜落し、炎上していた。

4章 仲間（後書き）

感想お待ちしております。
更新遅れてすみません。

くもう一つの抵抗運動く 「1」章 始まり（前書き）

これは、尾崎大介の妻、尾崎富美代のもう一つのレジスタンスです

くもう一つの抵抗運動く 「1」章 始まり

2012年 2月 12日

東京 新宿市

さつき夫の大介から連絡が来た。

内容はあまり教えてもらえなかったが、今日ロシアに旅立つと。

“すぐに帰る”という言葉を残して。

“すぐに帰る” 彼がいったら、約束どおりちゃんとすぐに帰って来た。

だから、あまり心配はしなかった。

だが今は違う。

心配しすぎて頭がどうにかなるのかと思ったぐらいだ。

ここまで心配する理由は今手にあるこの新聞の一枚の記事にあった。そこにはこう書いてあったのだ。

『ロシアの村、町消える。ロシアの新たな兵器開発が原因か』

瞬時に思った。ロシア…。今日大介が発したのはロシアだった。

「大丈夫だよな？大介」

尾崎 大介の妻、尾崎 富美代は、新しい命が宿り、ふくらんだお腹を触りながら言った。

ふとすると、富美代は慌てて、持っていた記事を投げ捨て、玄関に急いで外に出た。

くもう一つの抵抗運動く 「1」章 始まり（後書き）

最初はこんな感じで始まってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6948i/>

R E S I S T A N C E [レジスタンス]

2010年10月21日23時51分発行